共立女子大学家政学部紀要　第 63 号　(2017)

「Vogue Pattern Book」にみる Fashion Design(5)
－ 1980 年代後半の分析を基に －

Fashion Design in「Vogue Pattern Book」
—Based on analysis from the late 1980's—

平田　麻里子、大塚　絵美子、宮武　恵子

Mariko HIRATA、Emiko OTSUKA、Keiko MIYATAKE

はじめに

「Vogue Pattern Book」を手掛かりに、1950、1960、1970 年代、1980 年代は前半（以下：50 年代、60 年代、70 年代、80 年代前半）のファッション・デザインを取り上げた前 4 稿[1) 2) 3) 4)]に引き続き、本稿では 1980 年代の後半（以下：80 年代後半）のファッション・デザインについて考察をする。前 4 稿と同じく、ここで論じているファッションとは、被服に関する流行の様相として、服装やコーディネート等の全体の雰囲気やイメージを表す服飾表現の言葉としている。デザインとは、「ある目的のもとに創意工夫し、その構想を具体的に示すこと」である[5)]。本稿で扱う「Fashion Design」とは、流行の様相として創意工夫し具体的に示された服飾表現としている。

研究方法は、前稿の研究にならい行った 80 年代全般の時代を象徴する特徴的なファッション・デザインについて整理した内容を基盤に、『Vogue』誌が創刊されたアメリカに注目して、アメリカにおける 80 年代ファッションについて文献調査を行う。前 4 稿までの「Vogue Pattern Book」の分析では、パリのデザイナーや情報を基に編集されていた 50 年代、60 年代から 70 年代には次第にアメリカのデザイナー[(注 1)]の記述が増えてきた実態が明らかになった。さらに 80 年代前半では、イタリアや日本などの世界各地のデザイナーが注目され、アメリカのデザイナーが世界的に知られるようになってきた様子に触れた。これらの分析結果も本稿でアメリカに注目した背景である。

次に共立女子学園の図書館所蔵「Vogue Pattern Book」を用いて、先に上げた特徴的なファッション・デザインとアメリカにおける 80 年代ファッションの文献資料と照らし合わせて考察をする。本稿で取り上げる分析資料は、80 年代後半の 1980 年 JAN/FEB 号から 1984 年 NOV/DEC 号までの 29 冊（1985 年 MAY/JUN 号は欠号）を対象とする。特に 80 年代前半との比較を踏まえて分析を行う。

1．80 年代におけるアメリカン・ファッション

先行研究[6) 7) 8)]や文献[9) 10) 11)]では、アメリカ独自のファッションの名称をアメリカン・ファッションとして、その歴史的背景や概念を述べている。活動的でシンプリシティがキーワードで、自由なアメリカ的生活様式・ライフスタイルに即したスポーツの要素を取り入れたデザインがアメリカン・ファッションの特徴である。

1-1. アメリカン・ファッションにおけるデザイナーの役割

前述した先行研究や文献によると 70 年代までのアメリカン・ファッションの発展には、アメリカのデザイナーが大きな役割を担っていたとされていて、80 年代も引き続きその傾向であることが伺える。1985 年に出版された「Fashion merchandising: An introduction 4th Edition」[12]（全訳「アメリカファッション・ビジネス全知識[13]）によると、この時期の米国ファッション卸・小売業にとって、パリの既製服ショーはファッションのヒントを得る情報源としてますます重要になっているとされている。書籍の中では、アメリカ以外のフランス、イギリス、イタリア、日本等の海外の著名デザイナー名をまとめて、その時代にいかにデザイナーは重要であったかを提唱している[14]。70 年代までの成功事例を受けて、この時代の代表的なアメリカのデザイナーでは Danna Karan と Tommy Hilfiger を挙げている[15]。Danna Karan は、スポーティで機能的な作風でアメリカン・ファッションの代表的デザイナーである Anne Klein[16] のもとでチーフデザイナーとして働いていた。1985 年に Danna Karan Inc. を設立して独立し、9 月に初めて単独でファッション・ショーを開催した。「女性の脚線美と多忙な毎日」をスローガンとし、目指したのは「旅行や着回しに向いていて、着る人を魅力的に見せる洋服」だった。基本はウール・ジャージのボディスーツで、丸くしぼんだ形のスカートや伸縮性のあるサロン[注2]、ウールの巻きスカートなどを合わせた[17]。その後 1988 年に若い女性用の DKNY というより価格が安いラインを出し、ファッション・リーダーに広く受け入れられた[18]。ワーキング・ウーマンが一日中着こなせる、幾通りにも組み合わせられるワードローブがコンセプトである Danna Karan、そのセカンド・ブランドの DKNY ともアメリカン・ファッションの概念に基づいている商品だった[19]。1984 年にコレクションを発表した Tommy Hilfiger は、スポーツウェア[注3]・アイテムをカジュアルに重ね着したスタイルなどを提案し、世界的なブランドとなったとされている[20]。またジャージの代表格とされる Norma Kamali も 80 年代のパワー・スーツを着心地の良いスウェットシャツに仕立てて、この時代のアメリカのデザイナーとして忘れてはならない存在である[21]。

この時期、大手デパートがアメリカン・ファッションのデザイナーのプロモーションを大々的に行っている[22]。店内では各デザイナー毎に商品展開の場所を分けたり、広告のキャンペーンやテレビで広くアピールをした。その成功事例として、Bloomingdale's が Calvin Klein や Ralph Lauren などのファッション・ブランドを創り上げたとされている。Calvin Klein は、働く女性向けの着やすい服作りを強化し、女性が堅苦しくならずにプロフェッショナルに見えるようなソフトな仕立て、ニュートラルな色使い、着回しできるアイテムに注目した[23]。カシミア、シルク、イタリア製ウール生地などの高級服地をシンプルなシルエットに仕立てることで、ゆったりとしたエレガンスを演出したスタイルは、Calvin Klein のブランド・アイデンティティを確立した。Ralph Lauren は 1971 年にレディスをスタートし、スエードなどを使ったカントリー・スタイルで知られる[24]。Bloomingdale's 以外では、Henri Bendel や Bergdorf Goodman がアメリカン・ファッションを頻繁に取り上げている。

また、デザイナーによるブランド・アイデンティティの進化を表す結果として小売業の展開を行うようになり、扱う商品も衣服に留まらなくなっていく。1984 年に Ralph Lauren が初めて flagship store をマンハッタンのアッパーイーストサイドの歴史ある Gertrude Rhinelander Waldo House に開いた。店舗では、男女をターゲットとしたファッション・アクセサリー・香水・家具・などを扱っていたという。Isaac Mizrahi はファッション以外にシアターデザイ

ン、自社テレビ番組、Target[注4] のアクセサリーや服のデザインまで携わっていた。Isaac Mizrahi は、内面的な優雅さに溢れたデザインで知られる Perry Ellis[25] や Calvin Klein を経て、1987 年に自社を設立した。ニューヨークの雑多な文化と映画やテレビドラマを創造源に、都会的な着やすい服作りをした[26]。

このように 80 年代においてはデザイナーの名前は商品を展開する際に、極めて重要であったと言える。

1-2. メディアが発信するアメリカン・ファッション

この時代、アメリカのデザイナーやアメリカン・ファッションが広く一般の人々や世界に知られるようになった理由の背景のようにメディアから発信する情報が重要であったことに注目したい。

例えば、贅沢な衣服を提供するアメリカのデザイナーが広く知られるようになった理由については、次の記載内容が認められた[27]。1980 年にファースト・レディとなった Nancy Reagan は、ヨーロッパの贅沢な素材を使う James Galanos[28]、イブニング用でもシンプルで飾りすぎない Bill Blass[29]、異素材の組み合わせで定評のある Geoffrey Beene[30]、フォーマル・ドレスなど装飾された手の込んだイヴニング・ドレスで知られる Oscar de la Renta[31]、また帽子デザイナーの Adolfo[32] などが好みだった。それらデザイナーの衣装を着装した姿はメディアに露出されて、デザイナーの名前が広まったとしている[33]。アメリカの上流社会や有力な政治家夫人たちに好まれた衣装は、それを身にまとった様子がメディアで取り上げられるため、人々の関心も集まり、その結果として衣装のデザイナーの名前や情報を得ることができた。

また、アメリカン・ファッションが世界に知られるようになった理由として、この時代の特徴であるとされている 80 年に成立された CNN (Cable News Network: ケーブルニュースネットワーク) とケーブルテレビのチャンネルが沢山出来たことが挙げられている[34]。その事例は、MTV (Music Television) のエンターテイメントを対象としたチャンネル、ホームショッピング、ファッションに関するニュースネットワークなどである。

その他、80 年代前半に活躍した女優の Brooke Shields が雑誌によく登場していたことをきっかけに、その後スーパー・モデル[注5] が注目されるようになり、アメリカン・ファッションを広めるためにセレブリティ[注6] が良い宣伝となっていく。1980 年に Calvin Klein が、15 歳の Brooke Shields を広告に起用したことはセンセーショナルな提案だった[35]。その後 Christy Turlington、Linda Evangelista、Naomi Campbell 等のスーパー・モデルの存在が雑誌や広告キャンペーンで多く露出され、小売業に大きく影響を及ぼした。関連した事柄では、撮影する有名カメラマンは高度なテクニックを使い、また多額の広告キャンペーンを作ったとされている。

1-3. ライフスタイルから見るアメリカン・ファッション

アメリカン・ファッションの特徴の 1 つであるライフスタイルとファッションとの関連については、人々が飛行機で自由に動けるようになることにより、様々なシーンでファッションを楽しむ機会が簡単にできるようになったとされている[36]。そして当時のアメリカでは、西海岸や東海岸、あるいは都市の大小を問わず、全国的にカジュアル・ウェアとスポーツウェアが揃っている状況であった[37]。

この時期、米国労働省の報告によると 1977 年以降は働く女性の総数は驚異的な勢いで増え続けたとされている。働く女性は、人に会う、昼休みに買い物、仕事から帰る途中など、絶えずファッションに触れる機会を持つようになる。そして「Ms.」や「Working Woman」などの新雑誌の情報源もあり、ファッションへの関

心を急激に高めることにつながっていく。女性のワードローブは、ライフスタイルにより様々であったとする記述もある。例えば、毎朝出社前にテニスを楽しむビジネスウーマンなら、クローゼットの中には、レジャー・ウェアやフォーマル・ウェアに並んでビジネス用およびテニス用のファッションが入っている。家庭や家族を持つワーキング・ウーマンなら、仕事や家庭生活に合わせたファッションを取り揃えているなどライフスタイルに合わせたワードローブの実態を示している[38]。特にスポーツ服は、女性のテニス着やゴルフ着は日常の街着とは大きな変わりはないくらい大切であるとし、スポーツをすることが重要であると推測できる記述もある。ヘルス・クラブ、体操教室、ワークアウト・ジムが爆発的な人気を得て、レオタードやエクササイズ・スーツ、ウオーム・アップ・スーツその他、自己鍛練に向くファッションと付属アクセサリーなどの大きな市場が新たに生まれた。スポーツに関連すればどんな活動であれ、それ専用のファッションがすぐに提案され浸透し、欠く事ができない必需品になったのである[39]。

2.「Vogue Pattern Book」の分析

前稿にならい「Vogue Patterns Book」の目次に着目し分析を行った。目次は、80 年代前半と同様に“SPECIAL FEATURES”“IN EVERY ISSUE”“FASHION NEWS”の 3 つの大見出しとこれに付随する複数の小見出しから構成されている。その中でも“FASHION NEWS”には同誌が注目するファッション・デザインや最新のファッション動向が反映されているうえ、そのキーワードは小見出しからも読み取ることが可能であることは前稿において明らかにした。本稿においても“FASHION NEWS”の小見出しを概観し、80 年代前半に引き続き誌面を特徴付けると推察されるデザイナーと職場におけるファッションをキーワードに分析を進め、80 年代前半との比較を行い 80 年代の全体像を明らかにすることとした。

2-1. 目次”FASHION NEWS”から

2-1-1. 各国デザイナーの位置づけとファッション・デザインの特徴

“FASHION NEWS”を構成する小見出しから、特定のデザイナー名あるいは“designer”の語が含まれるものを抽出した。その結果、表 1 に示すように、欠号である 1985 年 MAY/JUN 号と 1987 年 JAN/FEB 号を除き、デザイナーをテーマとする小見出しが複数号に渡り掲載されていた（28 冊／ 5 年間）。

同様の傾向は 80 年代前半にも認められたが、各号における掲載件数を比較すると、80 年代前半は計 35 件、後半は計 60 件であり、後半の方が掲載件数の多いことがわかる。

さらに、80 年代後半の内訳を見ると、小見出しにデザイナー名が明記されているものが計 42 件、デザイナー名はないが“designer”の語が含まれるものが計 18 件あった。

このうち、前者 42 件に着目すると、約 85% にあたる 35 件はアメリカのデザイナーであることがわかった。並びに、後者 18 件のうち約 89% にあたる 16 件にもアメリカのデザイナーが含まれていた。

これより、アメリカのデザイナーが優位であったことは明らかであり、この傾向は 80 年代前半の流れを受け継ぐものと言える。

そこで、小見出しにデザイナー名が明記された計 42 件の中から、具体的なデザイナー名を抽出したところ、Calvin Klein が 9 件、Anne Klein が 6 件（70 年代には初出している。この他にセカンド・ラインである ANNE KLEIN II が 1 件ある）、Perry Ellis が 6 件（70 年代には初出している）、Donna Karan が 4 件（80 年代後半に初出している。この他にセカンド・ラインである DKNY が 1 件（80 年代後半に初出している））の順に掲載件数が多いことがわかった。

すなわち、70 年代に初出し 80 年代前半に最も多く特集された Calvin Klein の興隆は勢いを

表 1　目次 "FASHION NEWS" からデザイナー名あるいは "designer" の語が含まれる小見出しを抽出した結果

年	月	開始頁	小見出し
1985	JAN/FEB	42	Calvin Klein's Wardrobe Four
		68	Designer Stars
	MAR/APR	41	Perry Ellis 2-Pattern Wardrobe
		52	Eye on Designers
	JUL/AUG	60	Desingers on Your Career
		68	View from the Top Designers
	SEP/OCT	66	Calvin Klein 3-Pattern Wardrobe
	NOV/DEC	18	Designers: 10 of the Best
		28	Christian Dior's Paris Pattern Pair
1986	JAN/FEB	32	Collection Privée by Bill Blass
		50	Calvin Klein's Sunny Wardrobe
	MAR/APR	42	Perry Ellis 2- Pattern Wardrobe
		66	The Designer Dress
	MAY/JUN	28	Adventurous Adri
		32	Designer Moods: Attiude/ Latitude
		56	Anne Klein Wardrobe
	JUL/AUG	34	Karl Lagerfeld: Paris Dazzler
	SEP/OCT	32	Perry Ellis Wardrobe
		56	Geoffrey Beene Career
		82	Claude Montana Wardrobe
	NOV/DEC	46	The Best of Calvin Klein
1987	MAR/APR	28	Calvin Klein Career Wardrobe
		68	Perry Ellis 2-Pattern Wardrobe
	MAY/JUN	28	The Designer Eye
		38	Tamotsu Wardrobe
		48	Anne Klein Wardrobe
	JUL/AUG	70	Designer Futures
	SEP/OCT	44	Introducing Donna Karan
		62	Anne Klein Wardrobe Plan
		78	Calvin Klein Wardrobe
	NOV/DEC	36	Designer Directions: London, Paris, New York
1988	JAN/FEB	68	Designer News
	MAR/APR	60	Anne Klein Wardrobe
		70	Linen: The Designers Choice
	MAY/JUN	30	THE DESIGNER SPIRIT
		38	PERRY ELLIS MIXERS
		46	ANNE KLEIN Ⅱ
		50	DANNA KARAN
	JUL/AUG	46	BETTY JACKSON
		56	TAMOTSU IS BOSS
		68	ADRI'S KEY PIECES
		72	DESIGNER POINTS
	SEP/OCT	62	MEET MICHAEL MORTELL
		64	CALVIN KLEIN'S SLEEK MODERNS
		78	RALPH LAUREN CAREER
	NOV/OCT	28	DESIGNER BRILLIANCE
		38	NEWCOMER ISAAC MIZRAHI
		42	MIX DANNA KARAN
1989	JAN/FEB	68	PERRY ELLIS CAREER
	MAR/APR	34	DANNA KARAN
		36	ANNE KLEIN
		52	CALVIN KLEIN
		70	BILL BLASS LUXURY
		72	RALPH LAUREN
	MAY/JUN	64	ANNE KLEIN Ⅱ CAREER
	JUL/AUG	62	NEW DESIGNER SHAPES
	SEP/OCT	52	DESIGNER SHAPES
		70	DKNY
	NOV/DEC	34	TEN TOP DESIGNERS
		56	CALVIN KLEIN

計 60 件

増し、同じく 70 年代に初出した Anne Klein と Perry Ellis がそれに続くかたちとなっている。

一方で、同じく 80 年代前半に初出した Adele Simpson、Bill Haire、Joseph Picone らの名は 80 年代後半にはなく、その衰退がうかがえる。このことは、例え優位とされるアメリカのデザイナー達の間でも競争が繰り広げられていたことを示している。

また、かつて優位であったフランスのデザイナーも、掲載件数こそアメリカのデザイナーに劣るが 80 年代前半に続き健在である。例えば、Chloe（注：Chloe とはフランスのデザイナー Gaby Aghion が立ち上げたブランド名でありデザイナー名とは異なるが、「Vogue Pattern Book」において "designer" と紹介されていることから本稿においてもデザイナーとして扱うこととする）、Christian Dior 、Givenchy、Guy Laroche、Karl Lagerfeld、Nina Rich、

図 1　パリのデザイナー Dior（左）と Givenchy（右）によるファッション・デザイン
（「Vogue Pattern Book」"Designer Directions: London, Paris, New York" 1987 年 NOV/DEC 号 pp.46-47 より転載）

図 2　ニューヨークのデザイナー Perry Ellis によるファッション・デザイン
（「Vogue Pattern Book」"Designer Directions: London, Paris, New York" 1987 年 NOV/DEC 号 pp.42-43 より転載）

Ungaro、Yves Saint-Laurent らが全 60 件のうち約 28% にあたる 17 件（こううちデザイナー名が明記された小見出しが 3 件ある）に含まれている。このうち、小見出しにデザイナー名が明記されたものは 1985 年 NOV/DEC 号の "Christian Dior's Paris Pattern Pair"、1986 年 JUL/AUG 号の "Karl Lagerfeld: Paris Dazzler"、1986 年 SEP/OCT 号 の "Claude Montana Wardrobe" の 3 件であり、残り 14 件は "designer"

図 3　ロンドンのデザイナー Betty Jackson' s によるファッション・デザイン
（「Vogue Pattern Book」"Designer Directions: London, Paris, New York" 1987 年 NOV/DEC 号 pp.36-37 より転載）

としてアメリカを始めとする他国のデザイナー達と共に包括されている。

この "designer" らの中には、イギリスのデザイナーである Betty Jackson（1987 年 NOV/DEC 号、1988 年 NOV/DEC 号、1989 年 JUL/AUG 号・NOV/DEC 号の計 4 件）やイタリアのデザイナー Arnaldo Girombelli が立ち上げたブランドである Genny（1988 年 NOV/DEC 号）も含まれている。

さらに、80 年代前半に新たに登場した日本人デザイナーもまた後半に活躍が認められ、全 60 件のうち TAMOTSU が 5 件、ISSEY MIYAKE が 5 件（1986 年 MAY/JUN 号では両者が一緒に取り上げられる）含まれている。TAMOTSU においては、2 回に渡り小見出しにもその名が明記され特集されている（1987 年 MAY/JUN 号および 1988 年 JUL/AUG 号）。これより、イギリスやイタリアのデザイナーよりも TAMOTSU をはじめとする日本のデザイナーが重要視されていたことを読み取ることが出来る。

総じて、"FASHION NEWS" におけるデザイナーの出現率から読み取れば、フランスの重要性は保持されながらも時代はアメリカン・ファッションへと移行し、アメリカのデザイナー

図4 アメリカのデザイナー Calvin Klein によるファッション・デザイン
(「Vogue Pattern Book」"Calvin Klein Wardrobe" 1987 年 SEP/OCT 号 p.79 より転載)

図5 アメリカのデザイナー Donna Karan によるファッション・デザイン(パンツの場合)
(「Vogue Pattern Book」"Introducing Donna Karan" 1987 年 SEP/OCT 号 p.49 より転載)

図6 アメリカのデザイナー Donna Karan によるファッション・デザイン(スカートの場合)
(「Vogue Pattern Book」"Introducing Donna Karan" 1987 年 SEP/OCT 号 p.47 より転載)

図7 アメリカのデザイナー Anne Klein によるファッション・デザイン
(「Vogue Pattern Book」"Anne Klein Wardrobe Plan" 1987 年 SEP/OCT 号 p.65 より転載)

が優位にあると言える。同小見出しからは、アメリカのデザイナーこそが当時におけるデザイナーの象徴であるように目に映る。

そして、アメリカ、フランスのデザイナーをはじめ、日本、イギリス、イタリアのデザイナーらがそれぞれ手掛けた衣服に着目していくと、おおよそ国ごとに特徴が異なるだけでなく、国を越えた共通点も認められた。

例えば、図1はパリの Dior と Givenchy によるものである。Dior は非常に大きな襟にタックをよせたトップとミニスカートを合わせ、Givenchy はロング丈のジャケットの裾からスカートが見える。両者とも洗練されたエレガントな印象であると言えよう。一方、図2にあるニューヨークのデザイナーの Perry Ellis は、袖に膨らみを持たせながらも全体的にはシンプルなシルエットでシックな装いとなっている。いずれもこの時代に流行しているパワー・ショルダーをキーワードにデザインしている点は類似しているが、印象は異なる。

また、図3のロンドンのデザイナー Betty Jackson's によるものは、ギャザーを巧みに用いた装いが印象的で、シンプルな色使いの中にも左右非対称のラインなど動的な要素が認められ前者らと異なるが、共通点も挙げられる。その1つは、80年代前半にも認められたパワー・スーツやパワー・ドレッシングである。図1、図2、図3の中には、肩パッドを用いると共に腰のくびれを強調し、全体的に凸凹したシルエットを見ることが出来る。また、図2と図3には、肩の大きなボックス型のシルエットを見ることが出来る。

さらに、図1と図3に見られるボディ・コンシャスの装いは、80年代後半のファッション・デザインに特徴的な共通項であると言って良い。これについては、図2で取り上げた当時優位であったアメリカのデザイナーにおいても同様である。例えば、図4に示すデザインは、「シンプルなカッティングと選ばれた素材による服作り」によるミニマリズムを目指した[40]

図 8　日本のデザイナー ISSEY MIYAKE によるファッション・デザイン（その 1）
（「Vogue Pattern Book」“DESIGNER POINTS” 1988 年 JUL/AUG 号 p.76 より転載）

図 9　日本のデザイナー ISSEY MIYAKE によるファッション・デザイン（その 2）
（「Vogue Pattern Book」“Designer News” 1988 年 JAN/FEB 号 p.70 より転載）

図 10　日本のデザイナー TAMOTSU によるファッション・デザイン
（「Vogue Pattern Book」“Linen: The Designer’s Choice” 1988 年 MAR/APR 号 pp.74-75 より転載）

Calvin Klein によるものである。先述したように、肩の大きなコートによって流行のボックス型シルエットを演出し、ワンピースの素材にはニットを用いたうえに幅の広いベルトを併用し、ボディ・コンシャスの装いとなっている。

同号には、「体型に自信のない女性でも安心して着られるデザインで「旅行や着回しに向いていて、着る人を魅力的に見せる洋服」を目指した[41]と評された Donna Karan のデザインも掲載されているが、彼女のデザインにも体のラインを露わにしたボディ・コンシャスを見ることが出来る。図 5 および図 6 がその一例であるが、パンツの場合にも太いベルトを用いボディ・コンシャスを演出していることがわかる。同様に、同号に掲載された Anne Klein のデザインの中にも図 7 に示すようなボディ・コンシャスの装いが認められる。

一方で、流行を取り入れながらも強い個性を発揮したのが日本のデザイナーの三宅一生である。三宅は、「高度なプロセスと実験的なテクニックから生まれた生地やカッティングを用いながらも、着やすいデザインを追求[42]したとされるが、例えば、図 8 に示すようにギャザーを巧みに用いたジャケットや左右非対称のスカートといったファッション・デザインは他のデザイナーと様相を異にしている。また、図 9 の左下および右下にある三宅のデザインは、上衣の裾を立体的に変形させヒップを覆ったものであり、これらは欧米の衣服はもちろん日本の和服とも異なる創造的な装いである。

これに対し、同じ日本のデザイナーでも TAMOTSU は欧米のデザイナーと特徴を共にしており、アメリカン・ファッションを築き上げた一員として注目されている。そこに東洋的な要素は見受けられない（図 10 参照）。本名は戸田保で、1945 年に埼玉県で生まれた。桑沢デザイン研究所を卒業後、1970 年に渡米し、FIT（ファッション工科大学）も卒業している。また、当時、アメリカ大統領夫人であった Hillary Clinton の衣服を手がけたことでも知られているうえ[43]、アメリカでは百貨店でも取り上げられるほどデザイナーとしての地位を確立していた[44]。

概して、国を越えた流行として、パワー・ショルダー、パワー・スーツ、パワー・ドレッシ

表 2　目次 "FASHION NEWS" から "work" あるいは "career" の語が含まれる小見出しを抽出した結果

年	月	開始頁	"work"	開始頁	"career"
1985	JAN/FEB	56	What to Wear to Work		
	MAR/APR	46	Very Easy Vogue Working Easily		
	JUL/AUG			60	Designers on Your Career
	NOV/DEC	56	Working Silks: Very Easy Very Vogue		
1986	JUL/AUG	56	Vogue's Working Roles		
	SEP/OCT			56	Geoffrey Beene Career
1987	MAR/APR			28	Calvin Klein Career Wardrobe
	JUL/AUG			48	Career Options
	SEP/OCT	56	Working Classics		
	NOV/DEC			48	Investment Career Suits
1988	MAR/APR			27	Vogue Career
				36	Career Lifestyle: Janet Botaish
	SEP/OCT			36	CAREER OPTIONS
				78	RALPH LAUREN CAREER
1989	JAN/FEB	48	A WORKING SPRING	68	PERRY ELLIS CAREER
	MAR/APR	58	LOOKS THAT WORK BEST		
		66	THE BRIGHT WORK FORCE		
	MAY/JUN			64	ANNE KLEIN Ⅱ CAREER
	JUL/AUG			70	CREATIVE CAREER
	SEP/OCT			80	VOGUE CAREER
		計8件		計13件	

図 11 職場におけるファッション（その 1）（「Vogue Pattern Book」"LOOKS THAT WORK BEST" 1989 年 MAR/APR 号 p.61 より転載）

図 12 職場におけるファッション（その 2）（「Vogue Pattern Book」"VOGUE CAREER" 1989 年 SEP/OCT 号 p.81 より転載）

ング、ボディ・コンシャスが挙げられるが、その表現はおおよそ国により異なることが確認できた。

なかでも、時代を先導するアメリカン・ファッションの特徴は、先述したシンプルさをはじめ、持ち合わせの衣服で着回しが可能な装いにあると言えよう。表 1 を見ると、複数の小見出しに洋服ダンスを意味する "wardrobe" の語が認められる。その数は、60 件中 15 件あり、全体の約 25% を占める。さらに、小見出しの

図 13 職場におけるファッション（その 3）（「Vogue Pattern Book」"VOGUE CAREER" 1987 年 JUL/AUG 号 p.48 より転載）

後ろに記事内容の要約が記載されるようになる 1988 年 MAY/JUN 号以降は、その要約文の中に "wardrobe" の語が認められる（26 件中 6 件あり、これは全体の約 23% に当たる）。このことは、同誌がタンスの中にある衣服をコーディネートしたかのようなファッションを試みていた現れと言える。背景には、女性の社会進出が進むとともに外出の機会が増え活動的となった女性のライフスタイルの変容があると推察される。

2-1-2. 職場におけるファッション・デザイン

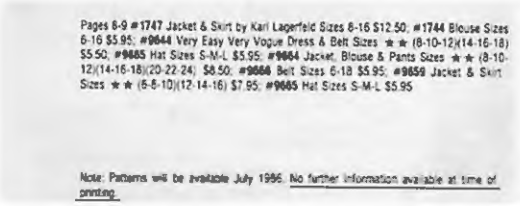
"FASHION NEWS" を構成する小見出しから、"work" の語を含み職場でのファッションを提案しているものを抽出した。その結果、1980 年代前半には計 6 件認められた "work" の語であったが、後半は計 8 件の同語に加え、計 13 件の "career" の語が認められた。

このことは、働く女性が一般化し台頭してきたことで、職場におけるファッションを表す語が抽象的な "work" から、経験を積んだニュアンスを持つ "career" へと変容しつつあることを示していると言って良いだろう。内訳を表 2 に示す。

ただし、"work" と "career" の語による服

表 3　巻末に掲載された絵型の数

年	掲載数(件)
1985	307
1986	343
1987	364
1988	382
1989	280
	計1676件


Pages 8-9 #1747 Jacket & Skirt by Karl Lagerfeld Sizes 8-16 $12.50; #1744 Blouse Sizes 6-16 $5.95; #9644 Very Easy Very Vogue Dress & Belt Sizes ★★ (8-10-12)(14-16-18) $5.50; #9685 Hat Sizes S-M-L $5.95; #9664 Jacket, Blouse & Pants Sizes ★★ (8-10-12)(14-16-18)(20-22-24) $8.50; #9666 Belt Sizes 6-18 $5.95; #9659 Jacket & Skirt Sizes ★★ (6-8-10)(12-14-16) $7.95; #9665 Hat Sizes S-M-L $5.95

Note: Patterns will be available July 1986. No further information available at time of printing.

図 14　絵型が掲載されていない例(詳細は次号に持越し)
(「Vogue Pattern Book」"Vogue Patterns Guide" 1986 年 MAY/JUN 号 p.75 #1747 他より転載、赤線は筆者による)

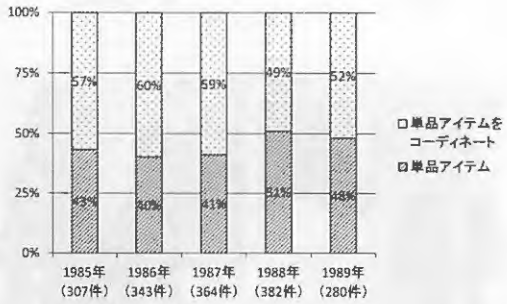


図 15　単品アイテムの提案か、あるいは、単品アイテムをコーディネートした提案かに関する調査結果(絵型の分析)

装の違いがあるわけではなく、共通するファッション・デザインが幾つか認められた。例えば、80 年代前半の職場のファッションの特徴としても挙げられた細身の女性の身体を肩パッドによって大きく直線的に力強く見せたものや、ボックス型のシルエット、装飾を排除した服装がそれである。図 11 に見られる左側の女性は、ベルト付きのワンピースに肩の大きなボックス型の黒いジャケットをコーディネートしている。これらは、記事中の語にもあるように、フェミニンなフリルは省き、なおかつハードさも省いたシンプルなラインとなっている。

そして、図 12 に見られる 3 通りの装いもまた、肩が大きくシンプルなラインではあるが、体に密着した素材を用いることによって女性らしい体つきを表したボディ・コンシャスな装いとなっている。また、左上と左下の装いより着回しが出来るような提案がなされていることがわかる。左上ではスカートスーツを着用しているが、左下ではそのジャケットを脱ぎ、ブラウスとスカートの組み合わせにアクセントとしてベルトを用いている。

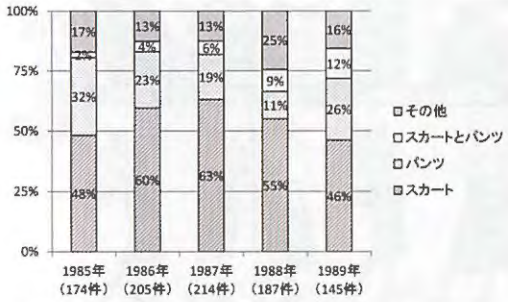
一方で、図 13 に見られるパンツ・スーツは、シルエットこそ直線的でユニセックスなものではあるが、胸元が開いた水玉のブラウスや大きなアクセサリーによって女性らしさを演出している。このような職場のファッションにおける女性らしさの演出は、80 年代前半よりも益しているように感じられる。

2-2. 巻末掲載の絵型から見るコーディネートの重要性

「Vogue Pattern Book」の特徴のひとつである巻末に掲載された絵型から、80 年代後半のファッション・デザインの特徴を捉えることを目的とし、前述の結果を踏まえ 2 つの事項について分析を行った。

前稿では、1981 年から 1984 年の間に毎年 300 件を超える絵型が認められたのに対し、80 年代後半においては、表 3 に示すように、300 件を超える絵型は 1988 年の 382 件をピークとし、1989 年には前年より約 100 件減った 280 件に留まっている。

こうした中、80 年代後半に特徴的な事項として、例えば "Note: Patterns will be available July 1986. No further information available at



注：() 内は単品アイテムをコーディネートしている絵型の件数

図 16 単品アイテムをコーディネートしているものについて、スカート・スタイルの提案かパンツ・スタイルの提案かに関する調査結果（絵型の分析）

time of printing."（図 14 参照）や "Further information not available at time of print. Pattern will be available in February."[45] などと記されたものが 1986 年以降に含まれていることが挙げられる。これらは、絵型の番号こそ設けられているものの、そこに絵型がない場合もあれば、出版時に提供できる情報に限りがあるため詳細は次号以降に持ち越しといった内容を記している。同種のものは、1986 年に 6 件、1987 年に 35 件、1988 年に 16 件、1989 年に 24 件あり、表 3 の件数からは除外している。

これらが意味する真意は定かでないが、単に編集側の準備不足というよりは、読者の注目を次号まで惹きつけようとするものとも考えられる。

抽出した絵型については、"Dress" や "Jacket"、"Skirt"、Pants" といった単品アイテムの提案とこれらを 2 つ以上コーディネートした提案に 2 別し分析を行った。

その結果、図 15 に示すように、1988 年を除き、単品アイテムをコーディネートした絵型（例えば、図 17-3 参照）が、単品アイテムの絵型（例えば、図 17-2 参照）よりも占める割合が高いことがわかった。このことは、80 年代前半と同じ傾向であり、後半もまたコーディネートの

図 17—1　4 種のパンツによるファッション
（「Vogue Pattern Book」"Newest Pants of '86" 1986 年 MAR/APR 号 pp.52-53 より転載）

図 17 － 2 "Pants" の絵型
（「Vogue Pattern Book」"Vogue Patterns Guide" 1986 年 MAR/APR 号 p.86 #9417 より転載、図 19-1 最左と等しい）

図 17-3 "Pants" と "Top" をコーディネートした絵型
（「Vogue Pattern Book」"Vogue Patterns Guide" 1986 年 MAR/APR 号 p.86 #9558,#1649 より転載、図 19-1 左から 2 番目と等しい）

時代への転換期であったことを示していると言えよう。

そこで、2 つ以上の単品アイテムをコーディネートしている服装に関して、それらの下衣はパンツなのかスカートなのか、あるいはその両方なのかについて絵型をもとに分析を行った。

80 年代後半は、前半と数値こと相違するが、全体傾向はおおむね一致すると見て良いだろう。図 16 に示すように、前半と同様に、毎年

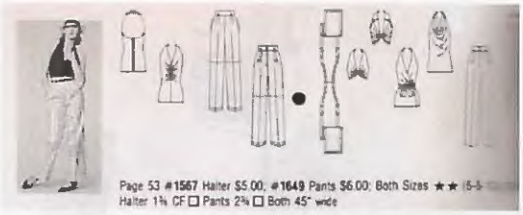


図 17-4 “Pants” と “Halter” をコーディネートした絵型
(「Vogue Pattern Book」“Vogue Patterns Guide” 1986 年 MAR/APR 号 p.86 #1567,#1649 より転載、図 17-1 右から 2 番目と等しい)

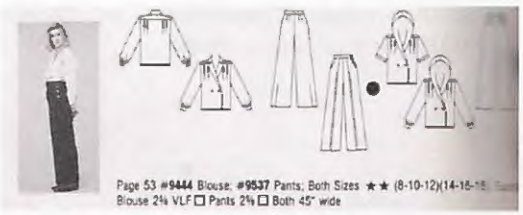


図 17-5 “Pants” と “Blouse” をコーディネートした絵型
(「Vogue Pattern Book」“Vogue Patterns Guide” 1986 年 MAR/APR 号 p.86 #9444,#9537 より転載、図 17-1 最右と等しい)

パンツよりもスカートの提案が多い。

さらに詳細を見ていくと、スカートを提案した割合が最も高い年は 1987 年の 63%、低い年は 1989 年の 46%、パンツを提案した割合が最も高い年は 1985 年の 32%、低い年は 1988 年の 11%、スカートとパンツの両方を提案した割合が最も高い年は 1989 年の 12%、低い年は 1985 年の 2%であることがわかる。すなわち、年々、各種の数値に変動はあるが、80 年代を通してコーディネートの対象アイテムとしてはパンツよりもスカートを提案する場合が多いと言える。

とは言え、ここで重要なことはスカートかパンツかの論争を展開することではない。はじめに、スカートおよびパンツの形が、80 年代前半と同様に多様化する傾向が認められることに着目したい。時代は、スカートおよびパンツの

図 18 5 種のスカートとブラウスによるファッション
(「Vogue Pattern Book」“Skirting Figure Problems” 1985 年 NOV/DEC 号 pp.46-47 より転載)

図 19-1 体型の大きな女性をテーマとしたファッション
(「Vogue Pattern Book」“Vogue for Large Sizes” 1986 年 SEP/OCT 号 pp.38-39 より転載)

様々な形を一人の女性が楽しむ時へと移り変わっていると言えるだろう。スカートとパンツは、女性にとってどちらも必要なアイテムなのである。そして、これらに流行のデザインを取り入れながらコーディネートしていくことが重要となってくる。例えば、図 17-1 は、4 種のパンツを提案したものである。図左より、腰から裾にかけて次第に細くなった 8 分丈のパンツ、同じくダブルの裾で折り返しているように見えるくるぶし丈のパンツ、腰から裾にかけ同じ幅でまっすぐに落ちたパンツ、裾の広がったワイ

図 19-2 "Coat" と "Jacket" "Skirt" をコーディネートした絵型
(「Vogue Pattern Book」"Vogue Patterns Guide" 1986 年 SEP/OCT 号 p.98 #9730 より転載、図 19-1 左側と等しい)

図 19-3 "Tunic" と "Skirt" をコーディネートした絵型
(「Vogue Pattern Book」"Vogue Patterns Guide" 1986 年 SEP/OCT 号 p.98 #9429 より転載、図 19-1 右側と等しい)

ドパンツが見て取れる。ただし、左の白いパンツはパンツ単品のみ絵型を掲載しているのに対し(図 17-2 参照)、他 3 種のパンツは、"Top" や "Halter"、"Blouse" とコーディネートした形で絵型を掲載している(図 17-3、図 17-4、図 17-5 参照)。これらの着方は、トップスをパンツの中に入れ、ベルトを用いウエストのくびれを強調しているように見て取れる。すなわち、同時代に流行のボディ・コンシャスを反映したものと言えよう。

また、図 18 は、5 種のスカートとブラウスをコーディネートしたものである。スカート丈は、膝丈かふくらはぎの半ばに相当するいわゆるミモレであり、その着方は先述したパンツの際と同様に、ブラウスをスカートの中に入れウエストを強調している。さらに、それぞれタイツの色も変えていることから、包括的に装いの組み合わせを提案していることが見て取れる。

さらに、これらのスカートは、いずれも下半身の体型カバーをテーマとしており、ここに 80 年代前半には認められなかったテーマを見ることが出来る。80 年代後半は、ファッション・デザインの力による体型カバーが注目されていたことを示す一例と言えよう。同記事は、社会進出する女性が増えると同時に、女性が人目に触れる機会が増すことを受け企画されたものと推察される。

体型カバーに関して加えれば、図 19-1 のように、体型の大きな女性をテーマとしてスカートにジャケット、コート、チュニック等をコーディネートしたものや(図 19-2、および、図 19-3 参照)パンツとこれらをコーディネートしたものもまた 80 年代前半には見られない事象である。さらに、図 19-1 の右上に "sized to 24" とあることからも分かるように、そのサイズ展開は非常に豊富である。アメリカのレディースサイズは 2(日本の 5 号に相当)、4、6 と 2 の倍数で展開していくが、単純計算すると 24 サイズは日本の 27 号に相当することになる。アメリカならではのサイズ展開がなされていると言えよう。

3. 考察

「Vogue Pattern Book」の分析から、前稿で言及した 80 年代前半の分析結果と本稿で言及した 80 年代後半の分析結果を総括するとともに、これらを文献にみる 80 年代ファッションの調査結果と照らし合わせながら 80 年代全体の特徴について言及する。

80 年代前半については、分析から明らかになった事象を 4 つに分類した。すなわち (1) 70 年代から継続して認められる事項として、デザイナー重視の傾向、様々な場面で受け入れられたパンツ、(2) 70 年代から兆候があり、80 年代に入り台頭してきた事項として、複数の単品アイテムをコーディネートすること、(3)

80 年代に入り新たに登場した事項として、パワー・スーツやパワー・ドレッシング、日本人デザイナーの登場、(4) 80 年代に入りこれまで見られた変化が停滞する事項として、スカート丈の選択の自由化（同誌における主流は膝下丈）が挙げられた。80 年代後半については、これを概ね踏襲しながらも新たな時代へと徐々に変化していく様子が見て取れた。

一般に“デザイナーの時代”と称される 80 年代であるが、デザイナーの間でも競争は繰り広げられており、80 年代全体においてアメリカのデザイナーがデザイナーの象徴として前面に押し出され、アメリカン・ファッションが提案されていることが「Vogue Pattern Book」より明らかになった。このことは、文献調査の結果と共通する事象である。例えば、大手デパートにおけるプロモーション戦略を成功させブランドを創り上げたとされる Calvin Klein や Ralph Lauren をはじめ、アメリカン・ファッションの代表的デザイナーである Anne Klein や、スポーティで機能的な作風とされる Danna Karan、そのセカンド・ブランドの DKNY は、同誌にも度々登場した。

加えて、かつて優位であったフランスのデザイナーが確固たる地位を築き不動のものとなった一方で、アメリカにおけるファッションはよりカジュアルなものへと独自に変化を遂げ、そのような状況下においてフランスのファッションは手が届きにくいものと認識され一歩退きつつある様子が誌面より見て取れた。

こうした中、誌面に複数回に渡り認められた“wardrobe”の語は、フランスとは異なりカジュアルで機能的な衣服を好んだアメリカのファッションの在り方を物語っていると言えるだろう。実のところ、Danna Karan が“wardrobe”をコンセプトとしていることは文献においても確認することが出来た。当時のアメリカで全国的にカジュアル・ウェアが揃っているとする文献内容とも近しい事象である。

とは言え、「Vogue Pattern Book」においてはアメリカとフランスのファッションに共通点も認められた。このことは、アメリカン・ファッションの根底にパリの既製服ショーがあるとする文献を想起させる。すなわち、誌面における両者のファッション・デザインは、80 年代を通して流行が認められたパワー・スーツ、パワー・ドレッシング、並びに、80 年代後半に顕著に認められたボディ・コンシャスを取り入れている点は同じであるが、その印象は明らかに相違していた。言うなれば、フランスは力強く、アメリカはシンプルなラインで仕上げている。

こうしてアメリカのファッションが独自に変化していく中、「Vogue Pattern Book」では日本人のデザイナーが 80 年代前半に初出すると、後半ではイギリスやイタリアのデザイナーよりも登場する回数を増やしていた。ISSEY MIYAKE は東洋とも西洋とも異なる独創性を披露し、TAMOTSU はアメリカのデザイナーと特徴を共にすることで受け入れられていた。先述したように、文献によると、アメリカでは大手デパートがアメリカのデザイナーのプロモーションを大々的に行っていた他、ファースト・レディや女優が着用する衣服をメディアが取り上げることで特定のデザイナーの名が周知されたとあったが、TAMOTSU もこの流れに従う 1 人であり、誌面でも活躍が認められた。また、同誌で取り上げられた Bill Blass や Geoffrey Beene もまたファースト・レディに衣服を提供した 1 人であり、贅沢な衣服を提供するアメリカのデザイナーとして活躍していることが文献からも確認できた。

上記の流れと平行して、「Vogue Pattern Book」からはアメリカにおける女性のライフスタイルの変化が見てとれた。1977 年以降、働く女性の急増に伴い、ファッションに触れる機会が増えるとともに関心が高まったことは文献を通しても明らかな事実であった。誌面からも、女性の社会進出が進むなかで、職場でのファッションを表す語としてこれまで使用されて

いた“work”は“career”の語へと代わり始めたことが見て取れた。女性にとって仕事とは一時的に担うものではなく、女性個人のライフスタイルや生き方を形成するものとなりつつあることがわかる。そして、職場のファッションには、80年代前半に引き続き後半もまた女性の有能さや地位を強調する手段としてパワー・スーツやパワー・ドレッシングが取り入れられていた。とりわけ、80年代後半ではその中にも女性らしさを演出する傾向が認められた。

このパワー・スーツやパワー・ドレッシングは、前述の通り80年代全体を通して流行した事象であるが、同時代はこれを軸としながらも様々なファッション・デザインが提案された多様化の時代でもある。例えば、絵型の分析から複数の単品アイテムをコーディネートする傾向は80年代全体に認められたが、時が進むにつれ、流行を抑えながらも様々な形のスカートやパンツを一人の女性が楽しむ傾向が認められた。時代はもはやスカートかパンツかの論争ではなく、形の多様化へと移り変わっていることが明らかになった。

さらに、多様化は形に留まらずサイズ展開にまで及んだ。誌面における80年代後半の特徴として、ファッション・デザインの力による体型カバーが挙げられる。なかには24サイズまで展開しているものもあり、アメリカならではの事象と言えるだろう。

総じて、「Vogue Pattern Book」にみる80年代は他の年代と比べれば特徴こそ少ないが、アメリカのファッション・デザインの軸がフランスのデザイナーからアメリカのデザイナーへと転換していく時代であると言える。また“wardrobe”に象徴されるコーディネートの面白みとシンプルでカジュアルなアメリカン・ファッションが確立されていく時代を写し出している点は注視すべき事象であるとともに、文献の裏付け資料としても同誌は貴重なものと言える。

注釈

注 1）ここでいうアメリカのデザイナーとは、アメリカ市場に商品を展開しており、評価されているデザイナーを示している。アメリカ国籍の有無については概念外としている。宮武恵子、平田麻里子、新田彩乃「“Vogue Pattern Book”に見る Fashion Design（3）－1970年代分析を基に―」共立女子大学家政学部紀要第61号 2015年1月 80頁

注 2）マライ語で〈筒〉の意味で、インドネシア、マライ半島の男女が用いている筒状の腰布のこと。田中千代「服飾事典」同文社 1975年2月2日 335頁

注 3）本来はスポーツ用の服装を意味するが、米国では公的な衣服以外すべてをスポーツウェアと呼ぶ傾向にある。実際にスポーツをするときの服はアクティブ・スポーツウェアといって区別している。引用文献からの記述からこの意味を解釈すると、気楽な服装や普段着などの形式ばらない着こなしで、今日で言うカジュアル・ウェアと同義であると考えられる。「ファッション辞典」文化出版局 2012年2月10日 59、61頁

注 4）ターゲット・コーポレーション（Target Corporation）が運営するディスカウント百貨店チェーン。小売店を1792店舗（2015年）運営している。アパレル以外には生活に関する製品が低価格で展開されている ターゲット公式ホームページ https://corporate.target.com

注 5）従来のモデルの枠を超えた大きな影響力を持ち、巨額のギャラを稼ぐトップ・モデルのこと。「ファッション辞典」文化出版局 2012年2月10日 256頁

注 6）原意は「名声、高名」または「有名人、名士」。本来は主としてアメリカで上流階級やハリウッドの有名俳優など、各分

野でのセレブレート（祝福されるべき）な一流人士を意味する。吉村誠一「ファッション大辞典」繊研新聞社 2011 年 4 月 1 日 930 頁

引用・参考文献

1）宮武恵子、新田彩乃「"Vogue Pattern Book" に見る Fashion Design (1) － 1950 年代分析を基に―」共立女子大学家政学部紀要 第 59 号 2013 年 1 月 47 ～ 65 頁

2）宮武恵子、新田彩乃「"Vogue Pattern Book" に見る Fashion Design (2) － 1960 年代分析を基に―」共立女子大学家政学部紀要 第 60 号 2014 年 1 月 49 ～ 80 頁

3）宮武恵子、平田麻里子、新田彩乃「"Vogue Pattern Book" に見る Fashion Design (3) － 1970 年代分析を基に―」共立女子大学家政学部紀要 第 61 号 2015 年 1 月 59 ～ 84 頁

4）宮武恵子、平田麻里子「"Vogue Pattern Book" に見る Fashion Design (4) － 1980 年代前半の分析を基に―」共立女子大学家政学部紀要 第 62 号 2016 年 1 月 109 ～ 128 頁

5）伊藤紀之編著、宮武恵子、玉田真紀、畑久美子「生活デザインの体系」三共出版株式会社　2012 年 11 月 1 日　3 頁

6）富澤修身「NY マンハッタンにおける衣服ファッション産業と小売業の 130 年史」経営研究 Vol.63 No.1 2012 年 1 ～ 41 頁

7）古賀令子「『Vogue』誌 100 年にみる、ファッション情報の変容 (4) 1931 ～ 1945 年の『Vogue』に見るファッションとその報道」湘北紀要 第 22 号 2001 年 88 ～ 91 頁

8）渡辺明日香「日本のファッションにみるアメリカの影響」共立女子短期大学紀要 第 57 巻 2014 年 2 月 25 頁

9）成見弘至「20 世紀ファッションの文化史―時代をつくった 10 人」河出書房新社 2007 年 11 月 30 日 117 頁～ 143 頁

10）シャルロッテ・ゼーリング「20 世紀のファッションデザイナー」578 頁～ 604 頁

11）「装苑」8 文化出版局 2001 年 8 月 1 日 107 ～ 115 頁

12）Elaine Stone「Fashion merchandising: An introduction 4 th Edition」Jean A.Samples 1985 年

13）イレイン・ストーン / ジーン・A・サンプルズ著　樫村志保訳「アメリカファッション・ビジネス全知識」株式会社丹青社 1988 年 4 月 30 日

14）13）に同じ。293 ～ 294 頁

15）富澤修身「NY マンハッタンにおける衣服ファッション産業と小売業の 130 年史」経営研究 Vol.63 No.1 2012 年 18 頁

16）「ファッション辞典」文化出版局 2012 年 2 月 10 日 639 頁

17）リンダ・ワトソン「ヴォーグ・ファッション 100 年史」株式会社ブルース・インターアクションズ 2009 年 9 月 1 日 123 頁

18）Charlie Scheips「AMERICAN FASHION」ASSOULINE 2007 年 210 頁

19）10）に同じ。597 頁

20）NJ・スティーヴンソン著　古賀令子訳「ファッションクロノロジー」文化出版局 2013 年 3 月 8 日　245 頁

21）10）に同じ。594 頁

22）18）に同じ。

23）ノエル・パロモ＝ロヴィンスキー「50 人のファッションデザイナー」グラフィック社 2012 年 9 月 25 日　22 頁

24）16）に同じ。659 頁

25）ジョージナ・オハラ著　深井晃子訳「フ

ァッション事典」株式会社平凡社 1988 年 8 月 25 日 34 ～ 35 頁
26) 16) に同じ。654 頁
27) 18) に同じ。210 ～ 214 頁
28) 16) に同じ。637 頁
29) 10) に同じ。589 頁
30) 16) に同じ。650 頁
31) 25) に同じ。126 頁
32) 25) に同じ。12 ～ 13 頁
33) 18) に同じ。209 頁
34) 33) に同じ。
35) 23) に同じ。24 頁
36) 23) に同じ。
37) 13) に同じ。14 ～ 31 頁
38) 13) に同じ。14 頁
39) 13) に同じ。28 頁
40) 深井晃子編「ファッション・ブランド・ベスト 101」株式会社新書館 2001 年 11 月 25 日 67 頁
41) 23) に同じ。
42) 16) に同じ。
43) 2016 年 3 月 20 日取得「ヒラリー・クリントンの服をつくるということ ニューヨークでモードの頂点に上り詰めた、知られざる日本人の軌跡 連載 戸田 保」DF online http://www.dfonline.jp/articles/-/6533
44) 2016 年 3 月 20 日 取 得「TAMOTSU - Fashion Designer Encyclopedia」Encyclopedia of Fashion http://www.fashionencyclopedia.com/Sp-To/Tamotsu.html
45)「Vogue Pattern Book」1987 年 JAN/FEB 号 82 頁 #9842